

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370026

研究課題名(和文) 幸福概念の理論的基盤の再構築 その文化的多様性と歴史的重層性の批判的検討を通じて

研究課題名(英文) Reconstructing the Theoretical Base for the Concept of Happiness: Critical Research on its Cultural Diversity and Historical Multiplicity

研究代表者

佐藤 啓介 (SATO, Keisuke)

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号：30508528

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幸福概念を思想的・文化的な重層性をふまえて考え直すことによって、幸福概念が、第一に、個人の主観的な幸福感には限定されない社会性・集団性を有した倫理的地平において考察されるべきものであることと、第二に、その幸福は、個人の次元を超えた社会的時間性や、ひいては形而上学的な世界の時間性にまで及ぶような多層的な時間論のなかで考えられるべき余地があることが明らかになった。以上の成果は、近年の社会心理学的な幸福論を補完し修正しうる意味を有していると思われる。

研究成果の概要(英文)：By rethinking the concept of happiness on its historical-cultural multiplicity, our research shows two ideas. First, this concept should be thought on the ethical dimension that could not be limited within the personal subjective happiness. Second, this concept can be thought in the wide time-scale that would extend from the social dimension to the metaphysical one. These ideas can revise the researches on happiness in social psychology.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：思想史 幸福論 倫理学 中国哲学 西洋思想 宗教哲学 政治哲学 日本思想史

### 1. 研究開始当初の背景

昨今、幸福度をめぐる社会調査が国内外で大きな注目を集めているが、現代においては幸福それ自体の内実が多様化し、その一義的な把握が困難な現状にある。幸福とは、今この時点における快・願望の充足にとどまらず、過去をどのように過ごし、将来どのような生を送るかという時間的側面を抜きには考えることができないものであろう。だが、家や共同体のあり方が変化したことで、旧来の幸福概念を支えてきた過去から未来への時間の連続性への信頼も失われ、幸福のかたちもまた変容せざるをえない状況にある。こうした背景から、現在における快や富の充足のみを幸福の内実とみなしがちな、昨今の狭隘な幸福概念の内実そのものを問い直す必要が生じていると考えられた。

### 2. 研究の目的

1の研究開始当初の背景にもとづき、近代以降における社会の変動と、それに伴う人間の時間性の根本的な変容を背景とし、現在という指標に集中する幸福概念を問い直すことが必要と感じられた。思想史の伝統を振り返るならば、人が何をもちて幸福とするかは文化圏ごとに大きく異なってきたが、現代において、そうした多様性は失われつつある。そこで本研究では、近代以降における複数の文化圏を横断する思想史研究を通じ、幸福概念の文化的多様性を明らかにし、そこから明らかになる、幸福を成立せしめる多様な時間性の理解を手がかりとして、幸福概念を人間や社会の根源的な時間性から改めて思索することで、その歴史的な重層性を明らかにすることを目指した。

### 3. 研究の方法

(1)本研究は、社会と個人が大きく変容した近代以降における日本・中国・ヨーロッパの三つの文化圏の近現代における思想史に探求の手がかりを求め、以下の三つの主題に着目し、それをグループに編成して研究を行った。

(2)幸福と時間の存立機制をめぐる思想史的研究： 前述のように、私たちが感じる幸福は、長期的な時間のなかで捉えることが重要である。いくつかの思想史の伝統には、心理学と経済学を枠組みとする数量化された現代の幸福概念を問い直し、概念の拡充を可能とする様々な契機が胚胎している。そこで、幸福と時間性の関係を原理的に考察した思想史の伝統（特に18世紀イギリスにおける道徳哲学と、近代中国における観相学）に着目し、幸福が時間とどう関係し、幸福が時間においてどう成立すると考えられてきたかを明らかにすることにした。

(3)幸福と共同体の関係をめぐる政治思想史・倫理思想史的研究： 幸福の所在を、個

人的生から社会的生に至る人間の生の多層性において把握する必要から、幸福をめぐる倫理思想史・政治思想史的研究を行い（特に西欧政治思想史と近代日本倫理思想史における幸福論）、個人の生にとどまらない共同的生における時間の重層性から幸福を把握しようと試みた。

(4)不幸な生と時間の関係をめぐる宗教思想研究： 幸福な生を問うならば、幸福ならざる生について、人がどのように考えてきたかは看過できない。なぜ世界に不幸があるのかという問いは、西欧では神義論として展開していく。そのなかで、不幸な生を救済するものとして、現世的な時間を切断する超越的な時間性としての終末が志向されてきた。本研究では、そうした宗教思想（特に近代西欧の神義論と、現代宗教哲学における神義論）を考察対象に含め、不幸な生の考察を行うとともに、現在に特化しがちな幸福の時間概念それ自体の捉え直しを行った。

### 4. 研究成果

(1)3グループごとに、それぞれ以下のような研究成果が得られた（また、その成果は各グループ所属のメンバーの論文・著書などとして公刊されている）。

(2)西欧・東洋の近代思想史研究においては、近代に幸福概念の世俗化が進むとともに、その幸福概念をもとにした道徳・倫理の構築が図られてきたという、幸福概念の道徳化の経緯が明らかになった。ここから、従来、幸福は個人の生にとっての問題であるとされてきた哲学的・倫理的な見解に修正を迫るような、幸福概念の社会的効用という視角を示すことができた。

(3)日本および西洋の近現代倫理思想・政治思想研究においては、恋愛や家族という親密圏、社会という公共圏の双方において、幸福が、個人を超えた世代や家、持続する社会など、過去や将来にまたがる時間性と不可分に捉えられてきたという、従来幸福論では強調されてこなかった一面が明らかになった。幸福の哲学では、個人の人生に対する満足という意味で、個人内での時間性への注目がなされることは一般的であったが、個人を超える時間性概念が幸福概念を考えるうえで無視しえないことが明らかになったことは、貴重な成果であると思われる。

(4)宗教思想研究においては、幸福論が出来る源泉の一つが、不幸という実存的体験にあることが確認されると同時に、そこから生じる幸福論が、世界全体の善さを問うような形而上学や、将来における救済を問うような時間論など、実存と世界との結びつきを切実に問い結びつける理路が求められることが明らかになった。それとともに、宗教思想の

観点から幸福論を問うことは、同時に、不幸に死んでいった死者たちを思惟する試みとも不可分であり、私たちの生を、死者という観点からとらえ直す試みでもあるという、独特な倫理性と時間性を有していることが明らかになったことは、際立った成果であると思われる。

(5)以上の3グループそれぞれの研究成果を総合することによって、本研究では、幸福概念を思想的・文化史的な重層性をふまえて考え直すことによって、幸福概念が、第一に、個人の主観的な幸福感には限定されない社会性・集団性を有した倫理的地平において考察されるべきものであることと、第二に、その幸福は、個人の次元を超えた社会的時間性や、ひいては形而上学的な世界の時間性にまで及ぶような多層的な時間論のなかで考えられるべき余地があることが明らかになった。以上の成果は、近年の社会心理学的な幸福論を補完し修正しうる意味を有していると思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計14件)

佐藤啓介、苦しみの叫び声は何を求めているのか 神義論から宗教哲学へ、基督教学研究、査読なし、35号、印刷中

佐藤啓介、死者は事物に宿れり 現代思想の「物質的」転回と考古学的想像力、現代思想、査読なし、44(1)、2016、232-242

佐藤実、心のありようによってかわる人相について、大妻比較文化、査読なし、17号、2016、19-33

福島清紀、近代西欧における弁神論の形成と「最善説」批判 「悪」をめぐる問いと応答、言語と文化、査読なし、13号、2016、177-194

宮野真生子、恋愛という「宿痾」を生きる、nyx、査読なし、2号、2015、248-263

佐藤啓介、あらゆる否定文は神に取り憑かれている デリダ-マリオンの否定神学論争とその現代宗教哲学的意義、日本の神学、査読有、54号、2015、23-45

佐藤啓介、無神論論争とキリスト教哲学論争 戦間期フランス知識人における「世俗化」の一断面、南山神学、査読なし、38、2015、189-206

森川輝一、アーレントのソポクレス解釈 ハイデガーとの対向のなかで、法学論叢、査読なし、176(5-6)、2015、208-235

福島清紀、相互的寛容への隘路 ピエール・パウル論覚書、言語と文化、査読なし、12号、2015、207-242

佐藤啓介、ヨハネとアンリ キリスト教思想からみるアンリの「聖書解釈学」、ミシェル・アンリ研究、査読なし、4号、2014、

25-49

佐藤啓介、神学者たちのキルケゴール 可能的なもの、そして不安と希望、現代思想、査読なし、42(2)、2014、95-105

奥田太郎、当事と他事の間で生き方を問う倫理学、倫理学年報、査読なし、63号、2014、8-17

佐藤実、中国イスラーム哲学史研究の幕あけ、東方、査読なし、387号、2013、27-32

佐藤啓介、死という悪に死者は抗議できるのか 神義論の宗教哲学への基礎的考察、基督教学研究、査読なし、33号、2013、273-289

[学会発表](計22件)

森川輝一、『現代思想と政治』をめぐる、京都大学人文科学研究所人文研アカデミー、2016年3月20日、京都大学(京都府京都市)

森川輝一、法と政治の間 空間をめぐるアーレントの省察、韓日政治思想学会2015年度共同学会議、2015年12月9日、ソウル(大韓民国)

佐藤啓介、苦しむことと被ること 不幸をめぐる宗教哲学的考察、日本宗教学会第74回大会、2015年9月6日、創価大学(東京都八王子市)

宮野真生子、後期田辺における「愛」の問題、第3回田辺哲学シンポジウム、2015年8月28日、福岡大学(福岡県福岡市)

福島清紀、寛容思想研究の現代的意義 比較思想的考察の試み、法政哲学会第35回大会、2015年6月13日、法政大学(東京都千代田区)

奥田太郎、排除なき薄い包摂を目指すシテイズンシップ養育の可能性 非臨床的臨床を試みる専門的素人としての哲学者の役割、日本哲学会第74回大会、2015年5月1日、上智大学(東京都千代田区)

宮野真生子、恋する身体 「いき」なふるまい、近代化的中的「神話」、2015年3月19日、台北市(中華民国)

森川輝一、アーレントの活動論再考、シンポジウム「実証的研究の文脈におけるハンナ・アーレント」、2015年3月8日、慶應義塾大学(東京都港区)

佐藤実、17世紀~18世紀の中国イスラーム漢籍にみえる女性観、中央大学経済研究所ジェンダー研究会、2014年11月28日、中央大学(東京都八王子市)

奥田太郎、自然化の行き着く先の倫理の非自然性 戸田山からウィギンズ、そしてヒュームへ、中部哲学会、2014年9月27日、豊田工業大学(愛知県名古屋市中)

佐藤啓介、無神論論争とキリスト教哲学論争 戦間期フランス知識人における「世俗化」の一様相、キリスト教史学会第65回大会、2014年9月19日、同志社大学(京都府京都市)

佐藤啓介、分離・区別・一致 キリスト教

哲学論争にみる真理の諸相、日本宗教学会第73回大会、2014年9月14日、同志社大学(京都府京都市)

佐藤啓介、否定の道のアポリア デリダ・マリオンの否定神学論争とその意義、日本基督教学会第62回大会、2014年9月9日、関西学院大学(兵庫県西宮市)

宮野真生子、論理において何をめざすのか 田辺元の「歴史」と九鬼周造の「現実」、第2回田辺哲学シンポジウム、2014年8月27日、北海道大学(北海道札幌市)

佐藤啓介、神学者たちのキルケゴール 可能的なもの、そして不安と希望、現代思想の源泉としてのキルケゴール(生誕200周年記念ワークショップ)、2013年11月30日、高崎経済大学(群馬県高崎市)

奥田太郎、当事と他事の間で生き方を問う倫理学、日本倫理学会第64回大会、2013年10月6日、愛媛大学(愛媛県松山市)

佐藤啓介、死と抗議と神義論 宗教哲学的考察、日本宗教学会第72回学術大会、2013年9月7日、国学院大学(東京都渋谷区)

奥田太郎、共感から「正義」の話しよう? ヒュームとスミスの政治哲学の可能性と限界、ヒューム研究会第24回例会、2013年9月6日、南山大学(愛知県名古屋市)

森川輝一、科学技術と政治思想の間、政治思想学会第20回研究大会、2013年6月25日、慶應義塾大学(東京都港区)

宮野真生子、近代日本の「恋愛」からみる「自己」という欲望、南山大学社会倫理研究所2013年度第5回懇話会、2013年6月22日、南山大学(愛知県名古屋市)

21 佐藤啓介、ヨハネとアンリ キリスト教思想からみるアンリ、日本ミシェル・アンリ哲学会第5回学術大会、2013年6月9日、関西学院大学(大阪府大阪市)

22 奥田太郎、自己変容と自己変容の語りとの隔たり 中岡成文『試練と成熟 自己変容の哲学』を読んで、応用哲学会第5回年次研究大会、2013年4月20日、南山大学(愛知県名古屋市)

〔図書〕(計12件)

ヴォルテール・福島清紀ほか、光文社、寛容論、2016、352(287-337)

宮野真生子・佐藤啓介ほか、ナカニシヤ出版、愛・性・家族の哲学1 愛 愛は結婚のあかし?、2016、230(佐藤65-100、宮野171-205)

宮野真生子ほか、ナカニシヤ出版、愛・性・家族の哲学2 性 自分の身体ってなんだろう?、2016、240(33-63)

藤田尚志・奥田太郎ほか、ナカニシヤ出版、愛・性・家族の哲学3 家族 共に生きる形とは?、2016、236(181-211)

加藤節・森川輝一ほか、晃洋書、政治概念の歴史的展開第8巻、2015、228(143-166)

眞嶋俊造・奥田太郎ほか、慶應義塾大学出版会、人文・社会科学のための研究倫理ガイドブック、2015、272(183-208)

栗原隆・奥田太郎ほか、東北大学出版会、生の倫理と世界の論理、2015、362(289-308)

宮野真生子、ナカニシヤ出版、なぜ、私たちは恋をして生きるのか 「出会い」と「恋愛」の近代日本精神史、2014、238

犬塚元・奥田太郎ほか、岩波書店、岩波講座政治哲学2:啓蒙・改革・革命、2014、260(125-148)

AKABAYASHI, Akira, OKUDA, Taro et al., Oxford University Press, *The Future of Bioethics*, 2014、768(575-578)

森川輝一ほか、岩波書店、岩波講座政治哲学5:理性の両義性、2014、240(53-74)

堀池信夫・佐藤実ほか、明治書院、知のユーラシア2:知の継承と展開 イスラームの東と西、2014、232(205-227)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

なし

取得状況(計0件)

なし

〔その他〕

特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 啓介(SATO, Keisuke)

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号: 30508528

(2) 研究分担者

福島 清紀(FUKUSHIMA, Kiyonori)

富山国際大学・地域交流センター・客員教授

研究者番号: 20228886

奥田 太郎(OKUDA, Taro)

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号: 20367725

森川 輝一(MORIKAWA, Terukazu)

京都大学・公共政策連携研究部・教授

研究者番号: 40340286

宮野 真生子(MIYANO, Makiko)

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号: 40580163

佐藤 実(SATO, Minoru)

大妻女子大学・比較文化学部・准教授

研究者番号: 70447671

(3)連携研究者  
特になし

(4)研究協力者  
新田 智通 (NITTA, Tomomichi)  
大谷大学・文学部・講師